科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号: 1 4 3 0 1
研究種目: 基盤研究(C) (一般)
研究期間: 2015 ~ 2017
課題番号: 15K06524
研究課題名(和文)精錬スラグはどこまで低塩基度化できるか? -脱リン限界能の評価と反応パスの解析-
研究課題名(英文) Inermochemical properties of low-basicity dephosphorization stags - Liquidus compositions and activities in CaO-SiO2-P205-FeO heterogeneous slags-
研究代表者
長谷川 将克(Hasegawa, Masakatsu)
京都大学・エネルギー科学研究科・准教授
研究者番号:4 0 3 3 5 2 0 3
父1) 沃正額(研充期间主体):(且按詮算) 3,900,000 円

研究成果の概要(和文):石灰石CaOを用いて溶鉄中の不純物であるリンを除去するプロセスにおいて、固体CaO の有効利用とスラグ発生量の低減を目標とし、CaO濃度が低い低塩基度スラグの熱力学的性質を明らかにした。 脱リン能を維持しながらどこまで低塩基度化できるかを検討するため、スラグの低塩基度域における相平衡関係 とP2O5活量・FeO活量の測定、固体CaOの有効利用に向けた最適な脱リン反応パスの検討、について実験をおこな った。 活量値から溶鉄中の平衡リン濃度を算出し、低塩基度スラグでもP2O5を取り込む固溶体が存在すれば充分な脱リ ン能を有することを示した。また状態図上の液相線に沿ったスラグの脱リン能について検討した。

研究成果の概要(英文): In steelmaking processes, there are incentives to reduce slag volume and CaO consumption. Towards better understanding of the phosphorus removal from hot metal with low-basicity slags, electrochemical technique incorporating MgO-stabilized zirconia was conducted to measure simultaneously the activities of FeO and P205 within heterogeneous CaO-SiO2-P205-FeO slags. The FeO activity was fairly insensitive to the variation of Ca3P208 content in solid solutions between Ca2SiO4-Ca3P208, while the P205 activity increased with an increase in Ca3P208 content. In this study, the liquidus compositions were also determined in the quaternary system CaO-SiO2-P205-FeXO at 1573 K. By using the present experimental results, phosphorus distribution ratio and FeO content in molten slag was consistent with the phase diagram of the pseudo-ternary CaO-(SiO2+P205)-FeO system.

研究分野: 化学熱力学

キーワード: 低塩基度スラグ 状態図 活量 リン分配比

1. 研究開始当初の背景 本研究課題は、石灰石 Ca0 を用いて溶鉄中 のリンを除去するプロセスにおいて、固体 Ca0 の有効利用とスラグ発生量の低減を目標 とし、Ca0 濃度が低い低塩基度スラグの熱力 学的性質を明らかにする。一般に脱リン生成 物 P₂O₅ はスラグ中で CaO と反応して Ca₃P₂O₅ となり、化合物 Ca₂SiO₄ 中に固溶するが、研 究代表者が報告した Ca0-Si02-P205 系状態図 (図1)は、Ca₂Si0₄-Ca₂P₂O₈固溶体が固体 CaO と共存できることを示しており、工業的な知 見と矛盾しなかった。また、Ca₂SiO₄-Ca₃P₂O₈ 固溶体は化合物 CaSiO₃とも共存できる。本報 告では下記の略記を用いる。FeO は非化学量 論化合物であるが、簡単に FeO と記述する。 $C_2S = Ca_2SiO_4 = 2CaO \cdot SiO_2$ $C_{3}P = Ca_{3}P_{2}O_{8} = 3CaO \cdot P_{2}O_{5}$ <C₂S-C₃P>ss: Ca₂SiO₄-Ca₃P₂O₈固溶体 $C_3S = Ca_3SiO_5 = 3CaO \cdot SiO_2$ $CS = CaSiO_3 = CaO \cdot SiO_2$ $C_4P = Ca_4P_2O_9 = 4CaO \cdot P_2O_5$ L3: Ca0-Si0₂-Fe0 三元系の液相 L4: Ca0-Si0₂-P₂0₅-Fe0 四元系の液相





図1 1573K での CaO-SiO₂-P₂O₅系状態図



図2 脱リン反応の模式図

研究代表者は<C₂S-C₃P>ss と共存する固相 が Ca0 から CS に変化すると、P₂O₅活量が 7 桁 も上昇することを見出した。これは、スラグ の塩基度が低下すると脱リン能が著しく低 下する可能性を示唆している。図 2 に、スラ グの脱リン能の違いが精錬反応に及ぼす影 響を模式的に示す。高塩基度スラグは精錬能 が高く平衡リン濃度が低いため、平衡に達す るはるか手前で反応を終了しても工業的要 求レベルを満たす。一方、スラグの精錬能が 低下して平衡リン濃度が上昇すると、平衡付 近まで精錬反応を進めないと要求レベルを 満足できず、低塩基度スラグの設計には平衡 値を取り扱う熱力学データが必須になるこ とを意味している。本研究課題では充分な脱 リン性能を維持しながら脱リンスラグをど こまで低塩基度化できるかを検討する。

2. 研究の目的

溶銑からの脱リン反応は式(1)で表される。 2[P]_{Fe}+5(Fe0)_{slag}=(P₂0₅)_{slag}+5{Fe} (1) log*K*(1) = log($a_{P205}/h_{P}^{2}a_{Fe0}^{-5}$) = -15.48 + 5026/(T/K)¹⁻⁴⁾ (2)

= -15.48 + 5026/(T /K)¹⁻⁴⁾ (2) a_i :成分 $i \circ Raoult 基準の活量$

h_i:成分 *i* の Henry 基準の活量

反応生成物の P_20_5 はスラグ中の< C_2S-C_3P >ss に取り込まれることが知られている⁵⁰。

本研究課題では、低塩基度スラグの脱リン 能を評価するために以下の実験を行う。

(1) 脱リンスラグの基本系 CaO-Si0₂-P₂0₅-FeO 四元系において、粉末エックス線回折 (XRD) および走査型電子顕微鏡・電子プローブエッ クス線マイクロアナリシス (EPMA)を用いて 固相と液相の相平衡関係を調べる。

(2)スラグ中の P₂0₅活量と FeO 活量を測定し、 低塩基度スラグを用いて精錬したときの平 衡リン濃度を算出する。スラグを低塩基度化 できる限界を熱力学的に明らかにする。 (3)熱力学データを基に、低塩基度スラグを 用いる際の最適な反応パスを提案する。



図 3 1573K での Ca0-Si0₂-P₂0₅-Fe0 系の相平 衡関係(模式図)

3. 研究の方法

1573Kにおける CaO-SiO₂-P₂O₅-FeO 四元系の 相平衡関係を図 3 に示す。本研究課題では、 CaO + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領域(図 3 (a))、 CS + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領域(図 3 (b))、 $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 二相共存領域における液相 組成を明らかにした。また酸素センサを用い た起電力法により成分活量を測定した。 (1)相平衡関係の調査

実験装置を図4に示す。ペレット状の試料 は同じ組成の粉末と伴に金属鉄るつぼに収 め、アルゴンガス気流中、1573Kにおいて48 時間以上保持した。1573Kにおいて相平衡さ せた後、Mg0 るつぼを押し下げてプラスチッ ク板を焼き切り、液体窒素中で試料を急冷し た。XRD により試料中に含まれる固相を同定 し、EPMAにより各相の組成を分析した。



図4 相平衡関係を調査する実験装置



(2) 起電力法による活量測定

①Ca0 + $\langle C_2 S - C_3 P \rangle$ ss + L4 三相共存領域

Fe0 活量測定の実験装置を図 5(a)に示す。 金属鉄と Fe0 の間の平衡酸素分圧 P_{02} を酸素 センサにより測定した。酸素センサの起電力 Eは次式で与えられる。

$$E = (RT/F) \ln \left[(P_{02} (ref.)^{1/4} + P_e^{1/4}) / (P_{02}^{-1/4} + P_e^{1/4}) \right] + E_*$$
(3)

 $Rはガス定数、Fは Faraday 定数、<math>E_t$ は熱起電力、 P_a は電子伝導パラメータである。

 $E_t/mV = -14.49+0.0227 (T/K)^{-8} (4)$ $log (P_e/atm) = 20.40-6.45\times10^4/(T/K)^{-9} (5)$ $log [P_{02} (ref.)/atm]$

= 8.84-3.01×10⁴/(T/K)¹⁰⁾ (6) 金属鉄と共存する純粋液体 {Fe0} を標準状態 とすると、Fe0 活量は次式で算出できる。

 $a_{Fe0} = (P_{02}/P_{02}^{\circ})^{1/2}$ (7) 式(7)中の P_{02}° は純粋固体鉄と純粋液体Fe0の 平衡酸素分圧であり、次のように与えられる。

(2)CS + (C_2S-C_3P) ss + L4 二相共存領域およい (C_2S-C_3P) ss + L4 二相共存領域

{Cu-Fe-P}液体合金中の Fe とスラグ中の Fe0の間の平衡反応式は次式で表される。

 ${Fe}_{Cu-Fe-P} + (1/2) 0_2 (gas) = (Fe0)_{slag}$ (9) $K(9) = a_{Fe}/a_{Fe}P_{02}^{-1/2} = 1/P_{02}^{-01/2}$ (10) 低リン濃度において〈Fe-Cu-P〉固溶体と共存 する {Cu-Fe-P} 液体合金中の Fe 活量 a_{Fe} はリ ン濃度に依存せず、次式が報告されている。 $\log a_{Fe} = -0.37 + 500/(T/K)^{11}$ (11) したがって、純粋液体 {Fe0} を活量の標準状

態とすると、FeO 活量は次式で算出できる。 $\log a_{FeO} = \log a_{Fe}$

+ (1/2)(log*P₀₂* - log*P₀₂*°) (12) 一方、{Cu-Fe-P}液体合金中の P とスラグ

中の P_2O_5 の間の平衡反応式は次式となる。 $2\{P\}_{Cu-Fe-P} + (5/2)O_2(gas) = (P_2O_5)_{slag}$ (13) $K(13) = a_{P205}/h_p^2 P_{02}^{5/2}$ (14) 系が平衡に達しているとき、反応式(13)の平 衡酸素分圧は反応式(9)の平衡酸素分圧に等

しい。 P_2O_5 活量 a_{P2O_5} の標準状態は仮想的な純粋液体 $\{P_2O_5\}$ とした。リン濃度が希薄なとき $\langle Fe-Cu-P \rangle$ 固溶体と共存する $\{Cu-Fe-P\}$ 液体 合金中の P 活量は次式で与えられる ¹²⁾。

$$10g \Pi_P - 10g [mass \pi P]_{Cu-Fe-P}$$

+ 4. 46 - 8710/(T/K) (15)
 $P_2(gas) + (5/2) O_2(gas) = P_2 O_5(1iquid)$ (16)
 $\Delta G^{\circ}(16) / J \cdot mo1^{-1}$
= -1534500 + 506. 2(T/K)¹⁾ (17)
(1/2) $P_2(gas) = \{P\}_{Cu}$ (18)
 $\Delta G^{\circ}(18) / J \cdot mo1^{-1} = -RT \ln(h_P/P_{P2}^{-1/2})$
= -125000 + 0. 54(T/K)¹³⁾ (19)
 $\zeta(17)$ 、(19) より反応式(13)の標準 Gibbs エ

ネルギー変化は次のようになる。

 $\Delta G^{\circ}(13) / J \cdot \mathrm{mol}^{-1} = -RT \ln K(13)$

= -1284500 + 505.1(*T*/K) (20) 式(14)、(15)、(20)から*a_{P205}が*求められる。

4. 研究成果

(1) 三相共存領域における液相組成

Ca0 および $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss と共存する液相中の Fe0、Si0₂、P₂0₅濃度と $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss 中の C₃P 濃 度の関係を図 6 に示す。図中には Ca0-Si0₂-Fe0 三元系の三相共存領域の液相組 成⁶⁾、Ca0-Si0₂-P₂0₅-Fe0 四元系の Ca0 + C₃S + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 および C₃S + C₂S + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 の各四相共存領域の液相組 成⁷⁾も併せて描いた。 $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss 中の C₃P 濃 度が 0~12 mass%の範囲では、液相中の Fe0 濃 度は C₃P 濃度の上昇と伴に低下した。その後 上昇し、Ca0 + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領 域内ではほとんど変化しなかった。また液相 中の Si0₂ と P₂0₅の濃度は極めて低かった。







図 7 CS および<C₂S-C₃P>ss と共存する液相 中の FeO 濃度および FeO 活量と固溶体中 C₃P 濃度の関係

CaO-SiO₂-P₂O₅-FeO 四元系において CS およ び<C₂S-C₃P>ss と共存する液相中の FeO 濃度 と<C₂S-C₃P>ss 中の C₃P 濃度の関係を図 7(a) に示す。CaO-SiO₂-FeO 三元系における C₂S + C₃S₂ + L3 および C₃S₂ + CS + L3 の各三相共存 領域の液相中の FeO 濃度⁶⁰に比べ、CS + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領域の液相中の FeO 濃度は低い値となり、 $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss 中の C₃P 濃 度が変化してもほとんど変化しなかった。



図 8 Ca0-(Si0₂+P₂0₅)-Fe0 擬三元系上に表し た相平衡関係

図8には本研究で得られた1573Kでの液相 組成を CaO-(SiO₂+P₂O₅)-FeO 擬三元系として 表した。CaO + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領 域、CS + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領域、 $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss と共存する液相線を描くことが できた。本研究で得られた液相組成は文献で 報告されている液相線^{14,15)}と整合していた。 (2)三相共存領域における活量



図 9 Ca0 + <C₂S-C₃P>ss + L4 三相共存領域 での活量と固溶体中 C₂P 濃度の関係

1573K における Ca0 + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三 相共存領域での Fe0 活量と $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss 中の C₃P 濃度の関係を文献値 ^{7,16)}と比較して図 9(a)に示す。Fe0 活量は Ca0 + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領域内ではほとんど一定であり、 Ca0 + C₃S + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 四相共存領域 あるいは $C_3S + C_2S + \langle C_2S - C_3P \rangle ss + L4 四相$ 共存領域において極小となった。これは図<math>6(a)に示した液相中の Fe0 濃度と $\langle C_2S - C_3P \rangle ss$ 中の C_3P 濃度の関係に矛盾しなかった。

CS + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領域での Fe0 活量の測定結果を図 7(b)に示す。本研究 で測定した Fe0 活量は $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss 中の C_3P 濃度が変化してもほとんど変化せず、 Ca0-Si0₂-Fe0 三元系における $C_2S + C_3S_2 + L3$ および $C_3S_2 + CS + L3$ の各三相共存領域の Fe0 活量¹⁶⁾に比べて低い値となった。Fe0 活量は、 Fe0 濃度と $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss 中の C_3P 濃度の関係 (図 7(a)) と同様の傾向を示したと言える。



図 10 CS + $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss + L4 三相共存領域 での P_2O_5 活量と固溶体中 C₃P 濃度の関係

CS + <C₂S-C₃P>ss + L4 三相共存領域での P₂0₅活量の測定結果を図 10 に示す。 <C₂S-C₃P>ss 中のC₃P濃度の増加とともにP₂O₅ 活量は上昇した。CS + <C₂S-C₃P>ss + L4 三相 共存領域ではCSの活量は1であるので、 $2CaO + SiO_2 = C_2S$ (21) $\log K(21) = \log a_{C2S} - 2\log a_{Ca0} - \log a_{Si02}$ = 4.78 at $1573K^{3,17}$ (22) $Ca0 + Si0_2 = CS$ (23) $\log K(23) = -\log a_{Ca0} - \log a_{Si02}$ = 2.92 at $1573K^{3,17}$ (24) $3CaO + P_2O_5 = C_3P$ (25) $\log K(25) = \log a_{C3P} - 3 \log a_{Ca0} - \log a_{P205}$ = 24.80 at 1573K^{1,18,19)} (26)式(22)、(24)、(26)より次式が得られる。

loga_{P205} = loga_{C29} - 3loga_{C25} - 19.22 (27) 式(27)は C₃P 濃度が増加すると C₃P 活量が上 昇し、C₂S 活量が低下するため、P₂O₅活量は上 昇することを意味する。図 10 に示した P₂O₅ 活量の測定値は式(27)と熱力学的に整合す ると言える。1573K における<C₂S-C₃P>ss 中の 活量を表す溶体モデルが提案されている²⁰⁾。 loga_{C25} = 0.0376 + log(1-Y) + 0.191Y² (28) loga_{C29} = 0.0068 + 2logY + 0.381(1-Y)²(29) 置換率 Y はモル数 nを用いて定義される。

 $Y = 2n_{C3P}/(n_{C2S} + 2n_{C3P})$ (30) CS と共存する<C₂S-C₃P>ss 中の P₂0₅活量は式 (27)、(28)、(29)から算出でき、計算結果を 図 10 に曲線で描いた。CS + <C₂S-C₃P>ss + L4 三相共存領域における P₂0₅活量の測定値はCS + <C₂S-C₃P>ss 二相共存領域の計算値よりも 低くなったが、これは<C₂S-C₃P>ss 中へ Fe0 が固溶した結果であると考えられる。

Ca0 + <C₂S-C₃P>ss + L4 三相共存領域の

<C₂S-C₃P>ss 中に固溶した Fe0 は 2.5 mass%以下であり、C₃P 活量は式(29)で表されると仮定できる。したがって、この三相共存領域のP₂0₅活量は、Ca0 活量を 1 とした式(26)に式(29)を代入して、次式で求められる(図 9(b))。 loga_{P205} = loga_{C3P} - 24.80

 $= -24.79 + 2\log (23)^2 + 0.381(1-Y)^2$ (31)

(3)スラグ-溶鉄間の平衡リン分配比

炭素飽和{Fe-C-P}合金中の Henry 基準の P 活量は次式で与えられる。

 $\log h_P = \log [mass\%P]_{Fe}$

+ $e_p^c[mass\%C]_{Fe}$ + $e_p^p[mass\%P]_{Fe}$ (32) $e_i^{\ j}$ は溶鉄中の相互作用助係数であり⁴⁾、 $[mass\%C]_{Fe}$ は炭素飽和条件下での溶鉄中炭素 濃度である。式(2)、(32)より、

 $\log[mass\%P]_{Fe} + e_P^P[mass\%P]_{Fe}$

 $= -e_{C}^{P}[mass %C]_{Fe} + (1/2) \log a_{P205}$

- $(5/2) \log_{Fe0} + 7.74 - 2513/(T/K)(33)$ Fe0 活量および P₂0₅活量を式(33)に代入すれ ば、本実験対象の三相共存領域を脱リンスラ グとして用いた場合の溶鉄中平衡 P 濃度 $[mass\%P]_{Fe}$ が求められる。また、液体スラグ 中のリン濃度が求められており、液体スラグ -溶鉄間の平衡リン分配比 L_p^{LFe} が算出できる。

 $L_p^{L/Fe} = (mass\%P)_1 / [mass\%P]_{Fe}$ (34) 平衡リン分配比 $L_p^{L/Fe}$ と液相中FeO濃度の関係 を図 11 に示す。熱力学的な脱リン条件は高 塩基度スラグ(低 P₂O₅活量)、高酸素ポテン シャル(高FeO活量)であり、図8に示した <C₂S-C₃P>ss 共存の液相線に沿って塩基度と FeO濃度が高くなるほど $L_p^{L/Fe}$ は上昇すると考 えられる。 $L_p^{L/Fe}$ の本研究結果は文献値^{14,21)} と合わせて相平衡関係と整合していた。



図11 平衡リン分配比と液相中のFe0濃度の 関係

(4) <C₂S-C₃P>ss + L4 二相共存領域での結果と 反応パスの解析

リンが $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss に濃縮する場合、 $L_p^{L/re}$ と塩基度の関係は図 11 と同様に液相線に沿って変化するが、リンが液相に多く含まれる場合には液相線に対応しないことが判明した。ただし後者の場合でも $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss が共存する限りは高い脱リン能を維持できる。 $\langle C_2S-C_3P \rangle$ ss と液相の二相共存スラグを脱リン剤として再利用することを検討したところ、二相共存を保ったままスラグ中の固相- 液相間のリン分配比を低下できれば、スラグ を複数回利用できる可能性が示唆された。

参考文献 1)Turkdogan and Pearson: J. Iron Steel Inst., **175**(1953), 393. 2) Iwase et. al.: Trans. Iron Steel Soc. AIME, (1984), No. 4, 69. 3) Kubaschewski *et. al.* : Materials Thermochemistry 6th ed., Pergamon Press, (1993), 257. 4)Sigworth and Elliott: Metal Science, 8(1974), 298. 5)水渡ら: *鉄と鋼*, **63**(1977), 1252. 6) Muan and Osborn: Phase Equilibria among Oxides in Steelmaking, Addison-Wesley Publishing Company, (1965), 113. 7)長谷川, 岩瀬: 鉄と鋼, 95(2009), 222. 8) Iwase et. al.: Trans. Iron Steel Soc. AIME, (1984), No. 5, 53 9) Iwase *et. al.*: *Trans. Jpn. Inst. Met.*, **25**(1984), 43. 10) Iwase *et. al.*: Electrochim. Acta, **19**(1979), 261. 11) Kaida et. al.: Steel Research Int., 74(2004), 393. 12)Kaida et. al.: Metall. Mater. Trans. B, 36B(2005), 43. 13) Iwase et. al.: Steel Research, 56(1985), 319. 14)Ito and Sano: Tetsu-to-Hagané, **69**(1983), 1746. 15) Inoue and Suito: *ISIJ Int.*, **46**(2006), 174. 16) Takeuchi *et. al.*: **68**(1997), Steel Research, 516. 17)Seetharaman ed.: Treatise on Process Metallurgy volume 1, Elsevier, Oxford, (2014), 539. 18) Yama-zoye et. al. : Trans. *Iron Steel Soc. AIME*, **13**(1992), 41. 19) Iwase et. al.: Arch. Eisenhuttenwes., **55**(1984), 471. 20) Hasegawa *et. al.*: *High* Temp. Mater. Proc., **31**(2012), 421. 21)Im et. al.: ISIJ Int., 36(1996), 517.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

〔雑誌論文〕(計 2件) ①R. Matsugi, K. Miwa and M. Hasegawa、 Activities of FeO and P₂O₅ in dephospho -rization slags coexisting with solid solutions between di-calcium silicate and tri-calcium phosphate, ISIJ International, 査読有、57巻、2017、1718-1724 https://doi.org/10.2355/isijinternation al. ISIJINT-2017-082 ②K. Miwa, R. Matsugi and M. Hasegawa、 Activities of Fe₀ in Molten Slags Coexisting with Solid Ca0 and $Ca_2SiO_4-Ca_3P_2O_8$ Solid Solution , ISIJ International、査読有、57 巻、2017、1725 -1732https://doi.org/10.2355/isijinternation al. ISIJINT-2017-188

〔学会発表〕(計 7件) ①K. Miwa, <u>M. Hasegawa</u>、Thermochemistry of heterogeneous CaO-SiO₂-P₂O₅-Fe_xO dephospho -rization slag、ISIJ Meeting、2015年9月 16 日、九州大学(福岡県・福岡市) ②松儀亮太, 三輪紘平, 長谷川将克、低塩基 度脱リンスラグの熱化学的特性~Fe0, P₂0₅ 活量同時測定~、日本鉄鋼協会、2015年9月 18日、九州大学(福岡県·福岡市) ③松儀亮太, 長谷川将克, 徳野隼也、低塩基 度スラグの成分活量に及ぼす Ca₂SiO₄-Ca₃P₂O₈ 固溶体組成の影響、日本鉄鋼協会、2016年3 月23日、東京理科大学(東京都·葛飾区) ④長谷川将克, 三輪紘平, 松儀亮太、 Ca₂SiO₄-Ca₃P₂O₈ 固溶体と共存する液相組成と Fe0 活量、日本鉄鋼協会、2016 年 9 月 21 日、 大阪大学 (大阪府・豊中市) ⑤<u>長谷川将克</u>、固液共存脱リンスラグの熱化 学-相平衡関係と活量の測定-、日本鉄鋼協 会・日本金属学会、2016年12月19日、大阪 大学中之島センター (大阪府・大阪市) ⑥長谷川将克, 齋藤太平、Ca₂SiO₄-Ca₃P₂O₈ 固 溶体中のP₂0₅活量と耐火物成分Mg0の固溶度、 北海道大学(北海道·札幌市) ⑦ M. Hasegawa, K. Miwa, R. Matsugi、 Compositions of liquid phases and activities of components in the $CaO-SiO_2-P_2O_5-FeO$ heterogeneous slags coexisted with Ca_2SiO_4 - $Ca_3P_2O_8$ solid solutions, lat International Conference on Energy and Material Efficiency and CO2 Reduction in the Steel Industry、2017 年 10月12日、神戸コンベンションセンター(兵 庫県·神戸市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)○取得状況(計 0件)

〔その他〕 京都大学エネルギー科学研究科 プロセス熱化学分野ホームページ: http://www.lupin.mtl.kyoto-u.ac.jp/

6. 研究組織

(1)研究代表者
長谷川 将克(HASEGAWA, Masakatsu)
京都大学・エネルギー科学研究科・准教授
研究者番号:40335203

(2)研究分担者なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者
三輪 紘平 (MIWA, Kohei)
松儀 亮太 (MATSUGI, Ryota)